

## 税関トピックス

# 麻薬探知犬について

## ～犬の性格まで見抜く目にも涙～

東京税関 麻薬探知犬訓練センター室  
育成担当上席監視官 布施 勝明

我が国の税関に配備している麻薬探知犬（以下「麻薬犬」という。）については、昭和54年に米国から輸入した2頭が最初の導入であるが、国内での育成は、昭和55年に開始された（国産初の配備は昭和56年）。以来25年が経過し、これまで約250頭の麻薬犬を育成してきた。税関の現場で活躍する麻薬犬については、これまでも本誌において何度かご紹介する機会を得ているが、今回は、麻薬犬の育成に携わるインストラクターと、厳しい訓練を経て麻薬犬として配備された犬以外の訓練で不合格となった多くの候補犬について、若干触れてみることにしたい。

全国の税関に配備される麻薬犬は、東京税関麻薬探知犬訓練センター（千葉県成田市に所在。以下「センター」という。）において一括して育成訓練しており、現在、センターでは、6名の育成担当監視官の他8名のインストラクターが育成訓練を行っている。

麻薬犬の育成は、麻薬犬としての資質のありそうな候補犬を数多く探し出すことから始まる。候補犬探しは、年間2回、育成訓練開始前の2ヶ月前ぐらいから行っており、ブリーダー（繁

殖家）や警察犬等の使役犬の訓練所等で飼育されている犬の中から、1歳前後の犬を候補犬として借用して訓練を行うこととなる。

麻薬犬は、1歳前後から訓練を始めるが、通常、繁殖した犬は、生後3ヶ月から6ヶ月程度で売買されるのが一般的で、1歳前後まで飼育する繁殖家はなかなか見つからない。仮に1歳まで飼育された犬がいても、次の繁殖用に残した犬か、何か問題があって残っていると考えられ、候補犬選びにも神経を使う。

犬も人間と同様に、同じ犬種であったとしても、性格や体力に個体差がある。麻薬犬として適性のある犬は、モノに対して好奇心が強い、人見知り？しない、元気があるなどといったことが挙げられ、候補犬を選ぶ際にもそれを見極める必要があるが、シャイな性格、健康に不安があるなどといったことが、センターに連れてきて初めて判明することも多く、苦勞して連れてきたのに、訓練せずに返却する場合もある。

盲導犬のように自己繁殖する場合を除き、警察犬等の使役犬を訓練する場合は、最初に成犬となる前の犬を購入してから訓練することが一

般的である。我々のように、提供者（繁殖家等）から犬を借用して訓練することは稀である。また、訓練で不合格となった場合は、提供者に犬をお返すことから、提供者の方はボランティア的な要素がとても強い人達ばかりである。中には、我が子のように育てた自慢の犬を提供していただくこともあり、不合格になった場合は、なかなか我々の訓練結果を理解してもらうことが出来ず、「4ヶ月程度の訓練で何がわかるか。犬は年齢と共に成長するものだ。」と、厳しいご指摘をいただくこともある。さらに、提供した犬が麻薬犬となることを確信され、自慢の犬を提供していただいたときには、期待通りの結果となれば問題ないが、努力の甲斐なく麻薬犬として認定できない場合は、提供していただいた方の顔が脳裏を横切り、インストラクターにとって一番辛い時となる。

インストラクターは、自らが選んで訓練した犬が晴れて麻薬犬となり、現場で活躍し、麻薬を摘発した報告を受けることが大きな喜びとなっているが、これは、これまで多くの候補犬を提供していただいた繁殖家等の方々のご協力の

上に成り立っていることはいうまでもない。

今後も、より一層犬に関する知識の習得に努めるとともに、育成技術を向上させ、優秀な麻薬犬の育成を目指したいと思っている。



訓練風景

## ～全国のハンドラーから～

### 東京税関 田山 裕美子 ノーブル号



育成訓練の最終評価で、担当していた犬が不合格になったため、他の合格犬を担当することになった。これが現在のパートナーであるノーブル号との出会いであり、本当の苦労の始まりだった。

実践訓練では、臆病な性格が出てしまい、目は泳ぎ、腰はひけ、普通に歩くこともできず検査どころではなかったが、周囲の方の力を借りながら、他の犬よりも長い訓練を経てようやく検査ができるようになった。現場デビューから約半年後に初摘発！それまでの苦労を全部忘れるくらい嬉しい瞬間だった。

### 横浜税関 小柳 渉 ーロバート号ー

訓練を始めた当時は、名前を呼んでも犬が反応しないほどハンドラーとしては未熟であり、適性が無いのではと不安の日々であった。しかし、少しずつ犬との信頼関係もできあがり、訓練初日から数えて7ヶ月後の本年2月に、大量ではなかったが初めて大麻草を摘発することができた。今後も、名前を呼んだ時に、初めて自分の元に来てくれた日の感動を忘れずに、ロバート号と切磋琢磨し、社会悪物品の発見に努めていきたいと思う。



### 神戸税関 齊藤 隆晴 ーシャネル号ー

「麻薬探知犬のハンドラーをやってきて最も嬉しかった瞬間！」



これまで1番印象に残っているのは、検査中に初めて担当犬であるシャネルとコミュニケーションがとれた時です。こちらの嗅がせたいポイントを嗅いでくれたという程度のことで、それまで「一人で」検査していたシャネルと初めて「一緒に」検査が出来た瞬間。途中からの引継ぎということもあり、仕事の上では先輩であったシャネルにやっと存在が認められた気がしました。

### 大阪税関 中村 麻美 ーチェルシー号ー

チェルシーは他の犬と比べると警戒心が強く初めは慣れてもらえるまで大変でした。排便に出してもしない、嗅がせたいポイントに反発する、ダミーの引き合いも引き合うどころか逃げるばかり、といった感じでした。しかし、根気よく向き合っていくうちに検査中の嗅がせたいポイントに来るようになり、ダミーを持ってきて引き合いを誘うようになってきました。今では私が楽しく検査をしているとチェルシーも楽しそうにそれを感じて、一層私も楽しくなるといった相乗効果のある関係になっています。忍耐力と親和関係の大切さを改めて実感しているところです。



### 名古屋税関 黒田 浩一 ーボス号ー



この4月から相棒ボス号と第一線の現場に出られるようになった。しかし、自分のイメージする検査を、相棒にどのようにすれば伝えることができるのか、日々、頭を悩ませている。今後は、麻薬類の摘発に向け、担当犬の特性を損なわずに自分の技術を更に向上させなければならぬが、これがハンドラーとしての使命であると肝に銘じ、一日も早く摘発できるよう頑張りたい。

**門司税関 荒木 大輔** **—アール号—**

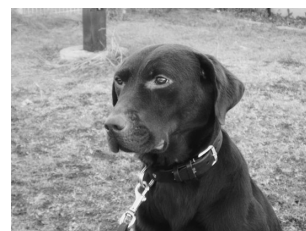
ハンドラーになり5年目、2年前からパッシブドックのアール号の担当となった。当初、犬の動きに気を取られて不安に駆られるあまり、周囲が見えなくなり、かえって旅客に接触し、クレームを言われたこともある。最近では、「失礼します、犬が通ります。」と大きな声を出して検査するよう心掛けているが、混雑する旅客検査場内で検査する場合、常に細心の注意力和高い集中力が要請されるなど気が抜けない。これからも周囲の状況に配慮し、不正薬物の摘発を目指したい。

**長崎税関 筑紫 貢** **—アンネ号—**

担当しているアンネは、検査現場へ出て2年程ですが、8件の麻薬残臭反応を出しています。これからも、アンネの示す反応を見逃さないよう細心の注意を払い、麻薬所持者が来た時には、必ず摘発したいと思います。苦労話としては、アンネは恥かしがり屋さんで、導入当初は、人前で排便をしてくれず、いつも犬舎にまきちらかしている状態でしたが、根気強く排便所へ連れ出す事により、外で排便をしてくれるようになりました。

**函館税関 柴田 倫典** **—ホープ号—**

現在、新千歳空港でホープ号と共に働いています。犬は暑いのが苦手です。ホープも涼しいと元気、雪にも大はしゃぎなのですが、さすがに北海道の真冬は堪えるようです。体力増強のため一緒にしているジョギングでも、-20℃の朝など、犬が凍った地面に耐えられなくなり立ち止まって足を交互に上げだします。応急処置として足の裏を素手で揉んであげると再び前に進めるようになります。日々「生き物が相手の仕事」と実感しながら、最北の地で麻薬類の摘発を目指しています。

**沖縄地区税関 吉本 聖** **—バビロン号—**

本年3月2日、那覇空港にて、バビロン号と旅具検査に臨んでいた。バビロン号とベアを組んで約半年。この日、ひとりの外国人男性に反応を示した。「あれ、いつもと違う。」そう感じた。反応旅客に対し嚴重検査を依頼した直後、検査場内のごみ箱にも反応を示し「大麻草」を発見した。その数日後、身辺に隠匿した「大麻草」を摘発した。同じ月に連続2回の摘発。やっと苦労が報われた。